

# 小松島市の祇園囃子

民俗班（徳島地域文化研究会）

高橋 晋一<sup>1\*</sup> 川内 由子<sup>2</sup>

**要旨：**徳島県の「祇園囃子」は、鳴り物に三味線を伴う長尺の囃子という特色があるが、その形態や楽曲構造から、近世～近代にかけて当時の流行音楽の影響も受けつつ、県南地域の伝統的な囃子（拍子）文化と人形浄瑠璃（太棹三味線）文化の伝統を踏まえ県内で「創造」されたものと考えられる。小松島市の2つの神社で伝承される祇園囃子にも同様の特色が見て取れるが、地域の学校と連携した効果的な伝承のあり方は特筆に値する。

**キーワード：**祭り、囃子、祇園囃子、三味線、伝承

## 1. はじめに

徳島県南部の一部地域に、「祇園囃子」と称される独特の祭り囃子が伝承されている。京都の祇園祭で奏される祇園囃子（基本的な鳴り物は鉦・太鼓・笛、通称「コンチキチン」）とは大きく異なり、徳島県の祇園囃子は、鳴り物に三味線を伴う長尺の囃子という特色がある。鳴り物の構成は、大太鼓・小太鼓・鉦・大鼓・小鼓・三味線が基本である（上勝町、那賀町、阿南市の一部ではさらに歌も入る）。

「祇園囃子」と呼ばれる囃子は全国各地に見られるが、その地域的展開に関する研究は少なく、徳島県の祇園囃子に関する専論は見られない。本稿では、徳島県における祇園囃子の特色を確認した上で、小松島市の2つの神社で伝承される祇園囃子の事例を具体的に紹介する。あわせて、現代社会における民俗芸能（囃子）伝承の方法という観点からも市内2事例の検討を行いたい。

## 2. 徳島県の祇園囃子

徳島県における祇園囃子の分布は、県南の小松島

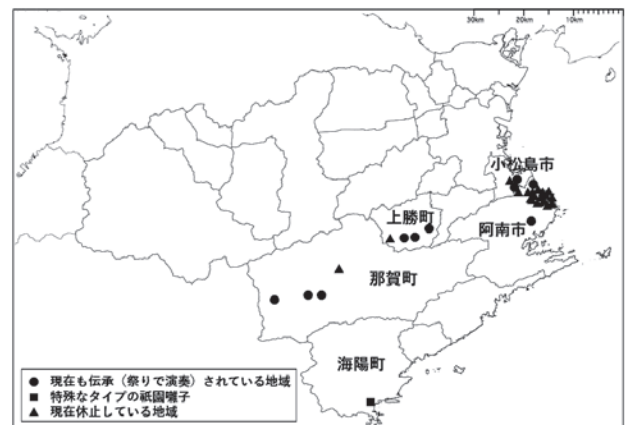


図1 徳島県における祇園囃子の分布

市、阿南市、那賀郡那賀町、勝浦郡上勝町に限られている。なお、海陽町久保の八阪神社にも「祇園囃子」と呼ばれる囃子が伝承されているが、中世の風流拍子物の系譜に属する古風な芸能（鞆鼓稚児舞と一人立獅子舞）を伴う特殊な囃子で、県内他地域の祇園囃子とはまったく系統が異なるため<sup>1)</sup>、ここでは分析の対象外とする。

県内の「祇園囃子」の分布状況を図1に、一覧を表1に示したが、とくに阿南市那賀川町・羽ノ浦町、小松島市を中心とした那賀川河口部に分布が密

1 徳島大学大学院社会産業理工学研究部

2 四国大学短期大学部

\* 〒770-8502 徳島県南常三島町1-1 徳島大学大学院社会産業理工学研究部 takahashi.shinichi@tokushima-u.ac.jp

表1 徳島県における祇園囃子一覧

No.	神社	所在地	奉納の機会	名称	鳴り物	備考
1	八幡神社	小松島市立江町青森	例祭	祇園囃子	大太鼓・小太鼓・鉦・大鼓・小鼓・三味線	西崎地区の祇園囃子は立江八幡神社祇園囃子保存会・祇園囃子伝承教室で伝承、棕崎地区の祇園囃子は現在休止。
2	豊浦神社	小松島市赤石町赤石	例祭	祇園囃子	大太鼓・小太鼓・鉦・大鼓・小鼓・三味線	
3	八幡神社	阿南市那賀川町八幡	例祭	祇園囃子	大太鼓・小太鼓・鉦・大鼓・小鼓・三味線	八幡神社の例祭には旧今津村10カ村の山車が集結したが、そのうちだんじりを有する以下の地区に祇園囃子が伝承され、祭りで競演した。現在も伝承されているのは島尻のみで、地元の厳島神社例祭で奉納されている。かつての伝承地：八幡、黒地、江野島（東・西）、今津浦、色ヶ島、手島、島尻、敷地。
4	八幡神社	阿南市那賀川町三栗	例祭	祇園囃子	大太鼓・小太鼓・鉦・大鼓・小鼓・三味線	八幡神社の例祭には旧平島村12カ村の山車が集結したが、そのうちだんじりを有する以下の地区に祇園囃子が伝承され、祭りで競演した。現在は祇園囃子は全地区で休止している。かつての伝承地：三栗、赤池、上福井（上分・出島）、刈屋（上・下）、江野島（東・西）、古津、大京原、熊氏、工地。
5	羽浦神社	阿南市羽ノ浦町中庄字千田池	例祭	祇園囃子	大太鼓・小太鼓・鉦・大鼓・小鼓・三味線	羽ノ浦傍示、宮倉傍示で伝承（現在休止）。
6	泉八幡神社	阿南市長生町本庄字宮の本	例祭	祇園囃子	大太鼓・小太鼓・鉦・大鼓・小鼓・三味線・歌	
7	三所神社	勝浦郡上勝町生実字府殿（瀬津）	例祭	祇園囃子	大太鼓・小太鼓・鉦・大鼓・小鼓・三味線・歌	
8	王子神社	勝浦郡上勝町福原字川北（福原）	例祭	祇園囃子	大太鼓・小太鼓・鉦・大鼓・小鼓・三味線・歌	
9	神明神社	勝浦郡上勝町旭字大栗の下（田野々）	例祭	祇園囃子	大太鼓・小太鼓・鉦・大鼓・小鼓・三味線・歌	天保までは歌はなく三下りの三味線で、打楽器を主体としたもの（古拍子）であった。天保の末に滝根有（旭村中分）が歌を作り、新田浅之市（生実村府殿）が節付けをしたという（徳島県教育委員会（1972）、14頁）。
10	八幡神社	勝浦郡上勝町旭字裏（八重地）	例祭	祇園囃子	大太鼓・小太鼓・鉦・大鼓・小鼓・三味線・歌	現在休止。
11	八幡神社	那賀郡那賀町掛盤	例祭	祇園囃子	大太鼓・小太鼓・鉦・大鼓・小鼓・三味線・笛・歌	現在休止。だんじりは、往時京都におもむき受講してきた祇園囃子で、笛・三味線・鼓等、歌曲入りで賑やかなことが有名であったというが、明治に入り休止した（木沢村誌編集委員会（1976）、353頁）。
12	八幡神社	那賀郡那賀町木頭和無田字ヨシノ	例祭	祇園囃子	大太鼓・小太鼓・鉦・大鼓・小鼓	昔は三味線もあった。
13	吉野神社	那賀郡那賀町木頭南宇字ムカイダ	例祭	祇園囃子	大太鼓・小太鼓・鉦・大鼓・小鼓	
14	八幡神社	那賀郡那賀町木頭北川字船谷口	例祭	拍子（祇園囃子）	大太鼓・小太鼓・鉦・大鼓・小鼓・三味線・歌	
15	八阪神社	海部郡海陽町久保	祇園祭	祇園囃子	大鼓（小太鼓）・大鼓・小鼓・横笛・謡人	中世の風流囃子物の流れを汲む民俗芸能（鞆鼓稚児舞と一人立獅子舞）を伴う。

になっている。

徳島県内の祭礼山車の鳴り物の構成は、地域により異なる。県北地域（吉野川流域）では5人乗り（大太鼓1・小太鼓2・鉦2）のだんじり（引くタイプの山車）または屋台（担ぐタイプの山車）が優勢で、シンプルな囃子を繰り返し叩く。一方、県南では、9人乗り（大太鼓1・小太鼓2・鉦2・大鼓2・小鼓2）のだんじりが基本で、「地」「地拍子」などと呼ばれるシンプルな囃子のほか、鳴り物同士、とくに大鼓と小鼓の小気味よい掛け合いを含む複雑で長い囃子（「拍子」と呼ばれる）が広く伝承されている<sup>2)</sup>。鳴り物の構成が単純な（鼓が入らない）県北

では、こうした鳴り物同士の緊密な掛け合いの文化は見られない。

徳島県の祇園囃子は一見すると非常に特殊な囃子にも見えるが、鳴り物の構成や楽曲構成を踏まえると、県南（那賀郡、勝浦郡、阿南市、小松島市、海部郡の一部）の神社祭礼に見られる「拍子文化」の上に発展したもの、言い換えれば、「拍子」と呼ばれる囃子の構成（大太鼓1・小太鼓2・鉦2・大鼓2・小鼓2）にさらに三味線が加わり、三味線を主体として演奏が複雑化したものと捉えることができる。

なお、県内の祇園囃子の三味線は、伝統的には義太夫節の太棹三味線が使われてきた。徳島県の祇園

囃子は、近世末～近代に県内で隆盛を見た人形浄瑠璃や義太夫節の三味線文化と同調する形で展開したものと考えられる。県内でも農村舞台（神社境内などに設けられた人形浄瑠璃を上演する常設の舞台）が集中して見られ、人形浄瑠璃の盛んであった県南地域に祇園囃子の分布が密であることは興味深い。

県内の祇園囃子の中には「京都から伝習した」という伝承を持つところもあるが（小松島市立江町、阿南市那賀川町、那賀町（旧木沢村）掛盤など）、そのことを直接裏付ける資料を見いだすことは難しい。阿南市羽ノ浦町羽ノ浦傍示の祇園囃子は天保年間（1830-44）に坂野村の龍川某の作曲と平島村の仙介という人の指導によって成立したと伝えられる。浄瑠璃の流行とともに囃子に三味線が取り入れられ、「新版歌祭文」野崎村の段のお染久松の段の道中囃子、「三十三間堂棟木由来」の木遣り音頭などが編曲して取り入れられている<sup>3)</sup>。阿南市長生町・泉八幡神社の祇園囃子は本庄地区に人形座があった関係で作られ、「朝顔日記」の外題などが組み込まれている（筆者聞き取りによる）。上勝町の祇園囃子は、天保年間までは歌はなく三味線と打楽器によるものだったが、天保の末頃、旭中分の滝根有が歌を作り、府殿の新田朝之市が節を付けたという<sup>4)</sup>。このように、祇園囃子＝三味線（や歌）入りの囃子（楽曲）という認識のもと、地域で創作された祇園囃子も存在する。

田井竜一・増田雄は、京都の祇園囃子が直接伝わったと考えられるのは近隣の3カ所のみで、全国各地の祇園囃子のほとんどは、京都で祇園囃子を聞いた人が部分的に聞き覚えてそれぞれの在所に持ち帰った「イメージとしての祇園囃子」であると論じている<sup>5)</sup>。小松島市の事例を含め、徳島県における祇園囃子の鳴り物の構成や囃子の楽曲構造は京都の祇園囃子（祇園祭の山鉦の奏楽）と大きく異なっている。音楽的には完全に「徳島流」にアレンジされたもので、京都の祇園囃子の系譜に直接つながる囃子と言うよりは、近世～近代の流行音楽の影響も受けつつ、県南の伝統的な囃子（拍子）文化、人形浄瑠璃や義太夫節の盛行を背景とする三味線文化（音楽）の伝統の上に県内で独自に発展した囃子と見るのが妥当であろう。

### 3. 小松島市の祇園囃子

小松島市では、現在、立江町の八幡神社、赤石町の豊浦神社の2神社の氏子により祇園囃子が伝承されている。八幡神社の祭神は譽田別命・帶仲彦命・息長足比売命。旧郷社。創建年代は不明だが宇佐八幡神社の分霊を勧請したと伝え、文明3年（1471）に中村岩戸の旧社地から現社地に遷祀したという。豊浦神社の祭神は手力男命。旧村社。寛永年間（1624-44）または元禄年間（1688-1704）創始との伝承がある。

八幡神社（立江町）の秋祭り（9月第3土曜）ではだんじりを有する西崎・椋崎の2地区で祇園囃子が伝承、演奏されてきた（椋崎の祇園囃子は現在休止）。両地区の囃子には、「地（打ち出し）」「地拍子」「祇園囃子」「千切り」の4種類がある。「地（打ち出し）」は、大太鼓・小太鼓・鉦で単純なリズムを打ち続ける。「地拍子」は大太鼓・小太鼓・鉦・大鼓・小鼓で奏され、鳴り物同士の複雑な掛け合いがある。「祇園囃子」は大太鼓・小太鼓・鉦・大鼓・小鼓・三味線で奏される長尺の囃子で、「千切り」は祭りの最後に大太鼓・小太鼓・鉦で入れるごく短い囃子である。

祇園囃子は、秋祭りの宵宮でだんじりが鳥居元から中、そして神前に移動する際に止まっただんじりの上で、また本祭でも鳥居元から神前に移動しただんじりの上で奏される（写真1）。伝承教室での伝承が始まってからは、だんじりの外で子どもたちが祇園囃子を披露する機会も設けられている（写真2）。



写真1 八幡神社のだんじり（西崎地区）  
（2011年9月18日撮影）





写真2 伝承教室の子どもたちによる祇園囃子の披露  
(2011年9月18日撮影)



写真3 豊浦神社の祇園囃子 (2011年11月16日撮影)

豊浦神社（赤石町）では、秋祭り（現在10月第3土日曜）のだんじりの囃子として、「地拍子」「前拍子」「祇園囃子」「大津絵」「大谷」の5種類の囃子が伝承されてきた。「地拍子」は大太鼓・小太鼓・鉦で奏されるシンプルな囃子（立江の「地」に相当）、「前拍子」は大太鼓・小太鼓・鉦・大鼓・小鼓の掛け合いのある少し長い囃子（立江の「地拍子」に相当）、「祇園囃子」「大津絵」「大谷」は大太鼓・小太鼓・鉦・大鼓・小鼓・三味線で奏される長尺の囃子であるが、このうち現在秋祭りで演奏されているのは「地拍子」「祇園囃子」の2曲である。「豊浦神社祇園囃子の歴史」に「豊浦神社の祇園囃子は『囃』『大谷』『大津絵』の3曲が優雅な楽曲で、特に注目を引き人気が高かった」とあり<sup>6)</sup>、現在当地では「囃」を狭義の「祇園囃子」と捉えているが、本来「大津絵」「大谷」も合わせた三味線の入る3曲が祇園囃子とされていたことがわかる。祇園囃子は、伝承教室の子どもたちとサポートの大人たちにより、秋祭りの宵宮に拝殿内、だんじりの上で、また本祭りの日は境内で披露される（写真3）。

八幡神社（立江町）は、慶長16年（1611）に小笠原兼幸により再建されたとされる。兼幸は八幡社を篤く崇敬し、檀鶴（だんじり）を造り、京都から祇園囃子の打ち子を迎え、氏子に習得させて例大祭に奉納したとの話が伝わる<sup>7)</sup>。旧豊浦浜村（赤石町）では、明治から昭和に至るまで、藁製品や材木・炭を赤石港より京阪神に出荷しており、昭和30年頃まで赤石は港として非常に栄えた。明治の終わり頃、豪商が京都の祇園でよく芸者と遊んでいたが、その芸

者を豊浦神社の例祭に招き、祇園囃子を氏子達に教えたのが、豊浦神社の祇園囃子の始まりという<sup>8)</sup>。「大津絵」は近世末～明治時代に流行した三味線伴奏の端唄（一種のお座敷唄）の題名であり、関西方面との文化交流の歴史も含め、徳島県の祇園囃子の出自の一端を考える上で興味深い。

八幡神社・豊浦神社の祇園囃子で使われる鳴り物や楽曲構造は、県内他地域の祇園囃子と共通した特徴が見られる。音楽的には、京都の祇園囃子の直接的な影響は感じ取れない。八幡神社と豊浦神社の距離は約1.2kmと近く、昭和30年代まで豊浦神社のだんじりが八幡神社の秋祭りに参加していた。しかし、両地域の祇園囃子を採譜してみると楽曲としては別の曲と言ってよく（メロディーや構成に類似点は見いだせない）、相互の伝播関係は考えにくい。

#### 4. 祇園囃子の伝承システム

過疎・高齢化、少子化、生活様式や娯楽の多様化、多忙化等の要因により、全国的に、地域の伝統的な祭りや民俗芸能を維持することが困難になってきている。こうした中、後世への伝承に向けて、各地でさまざまな工夫が試みられている。そうした方法の一つに、地域の学校との連携による「学校伝承」という形態がある。小松島市の2事例においても、学校との連携により、伝承の危機を乗り越えようとしている。

立江町の棕崎地区は3つの町内会からなり、3年に1回、だんじり当家が回ってきて囃子を担当する。しかし、メンバーの減少等により、祇園囃子は

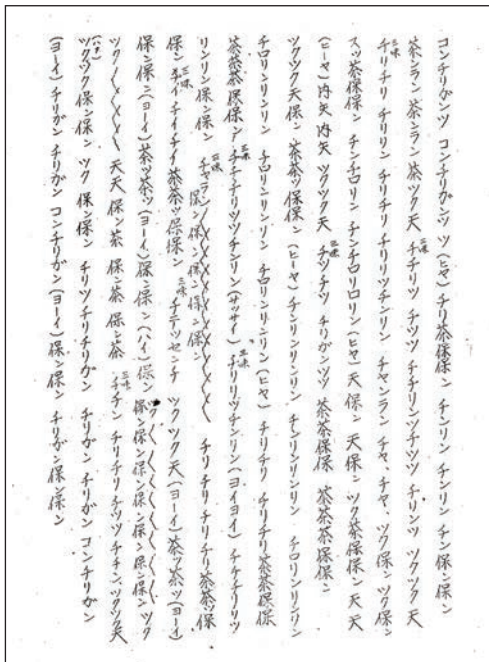


写真4 祇園囃子の譜面（西崎森丁，昭和34年）

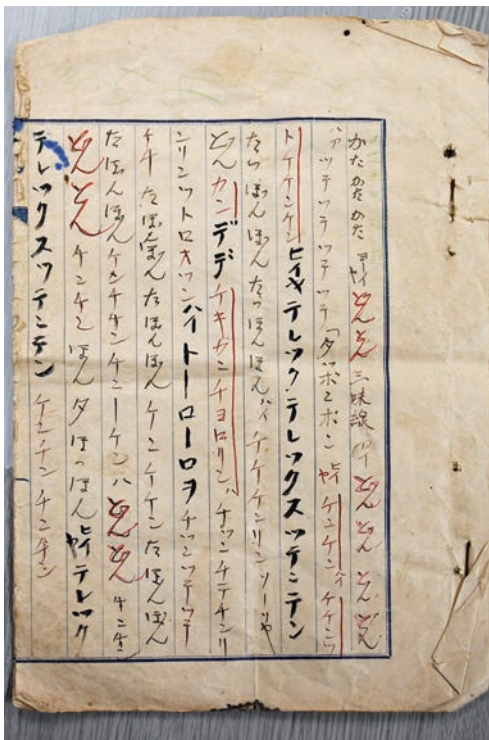


写真5 祇園囃子の譜面（棕崎地区，昭和14年）

昭和20年代に休止した。西崎地区は9つの町内会からなり、9年に1回、だんじり当家が回ってくる。しかし、各当家組で順に囃子を担当するという体制が維持できなくなり、1966年に地域の枠を越えて「立江八幡神社祇園囃子保存会」を結成して伝承してきたが、メンバーが次第に減少。2005年、学校の

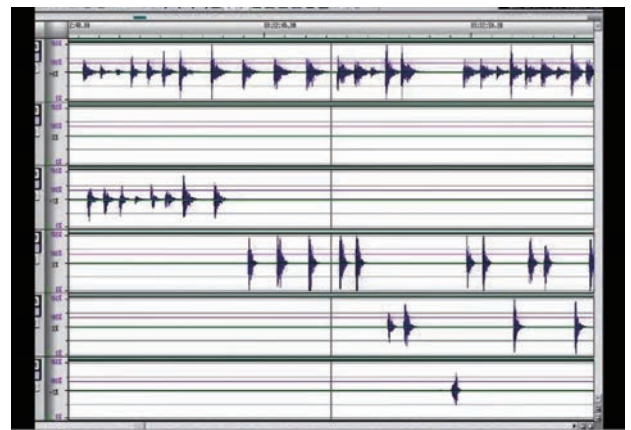


写真6 練習用DVDの画面（立江八幡神社祇園囃子伝承教室）

週休2日制導入に伴う地域活動の取り組みとして、立江小学校と連携して「祇園囃子伝承教室」を創設、以後、保存会メンバーと伝承教室の子どもたち（小学生や幼稚園児）で祇園囃子を伝承している。

豊浦神社においても、保存会員の減少により祇園囃子が伝承の危機を迎えたが、2009年に地元の新聞小学校と連携して「祭祇園囃子教室」を結成し、保存会メンバーとともに伝承に取り組んでいる。2015年頃には三味線も復活した。

囃子の練習・伝承に際して、「チンチキチンチキ」など、耳に聞こえる通りに囃子の演奏を紙に書き出した「譜面」を有している地域は多い。立江町西崎・棕崎地区でも譜面が作られ、練習の際に使われてきたが（写真4、写真5）、立江町では、祇園囃子伝承教室発足の2005年頃から、教室の練習に鳴り物の演奏タイミングを視覚的に確認できるDVDを作成、活用している。DigiOnSoundというサウンド編集ソフトを用い、囃子の演奏（音声データ）を鳴り物ごとにマルチトラック画面で示したもので（写真6）、波形のピークに合わせて鳴り物を打つことで囃子を効果的に修得できるようになっている。このDVDにより練習の効率が格段に上がり、短期間で囃子を修得できるようになったという。豊浦神社の祭祇園囃子教室でも、2012年頃に同様の形式で囃子のDVDを製作し、練習に活用している。

## 5. おわりに

以上、徳島県内の祇園囃子の特色の指摘を踏まえ、小松島市の祇園囃子の事例を紹介してきた。徳



島県の祇園囃子は、基本的に三味線（さらには歌）の入る長尺の囃子という特徴を有しているが、打楽器中心のシンプルな（一定のリズムを刻み続ける）祭り囃子とは異なり、三味線のメロディーを中心に鳴り物の掛け合いを含んだ、複雑で変化に富む楽曲の域に達しており、全国的に見ても非常にユニークで特色のあるものである。

徳島県の祇園囃子は、音楽的には京都の祇園囃子の直接的な系譜を引くと言うよりは、近世～近代にかけて、当時の主に関西圏における流行音楽の影響も受けつつ<sup>9)</sup>、県南地域の伝統的な囃子（拍子）文化と人形浄瑠璃（太掉三味線）文化の伝統を踏まえ、徳島県独自の個性的な囃子として「創造」されたものと考えられる。

小松島市の祇園囃子も、県内他地域の祇園囃子と同様、三味線の入る長尺の囃子という性格を有しているが、立江町（八幡神社）・赤石町（豊浦神社）ではそれぞれ異なった楽曲が伝承されている。前者では祇園囃子は1曲、後者では「囃」「大谷」「大津絵」の3曲が伝えられている。

祇園囃子は（打楽器に比べ）演奏の難しい三味線が入り、複雑で長い囃子であることから、一般的な囃子以上に伝承が困難であるが（阿南市那賀川町や羽ノ浦町では、三味線の伝承者がいなくなり、祇園囃子の伝承が途絶えている）、小松島市の2地区（立江町、赤石町）では地域の学校と連携しつつ効果的な形で伝承に努めていることは、DVDによる先進的な練習方法の創案とともに特筆に値する。

## 謝辞

調査に当たっては、以下の方々にとくにお世話になりました。ここに記して謝意を表します。

大住尚樹氏、赤岩一郎氏、森本靖雄氏、浅利一郎氏、森本利雄氏、田中博氏、廣田和三氏（以上八幡神社）、井上文夫氏、植田勇氏、船越和義氏、堀田康二氏（以上豊浦神社）。

## 注

- 1) 植木 (2001), 高橋 (2003)。
- 2) 高橋 (2008), 高橋 (2015)。「拍子」は数分～10分程度、祇園囃子は10～20分程度の長さのものが多く、祇園囃子は往々にして複数の「段」からなっている。
- 3) 羽ノ浦町史編さん委員会 (1996), 89-90頁。
- 4) 徳島県教育委員会 (1972), 14頁。上勝町誌編纂委員会 (1975), 110頁, 202頁。
- 5) 田井・増田 (2005), 79-80頁。
- 6) 「豊浦神社祇園囃子の歴史」(豊浦神社作成)による。
- 7) 「立江八幡神社祇園ばやし」(八幡神社作成)による。
- 8) 「豊浦神社祇園囃子の歴史」(豊浦神社作成)による。
- 9) 田井・増田が全国各地の祇園囃子の出自について示唆するように (田井・増田 (2005), 79-80頁), 京都で聞き覚えた／伝習した祇園囃子＝祇園祭の山鉦の奏楽にインスパイアされて創られたという観点から徳島県の祇園囃子を検討することも必要だが、本稿で紹介した豊浦神社の例のように、祇園に代表される花街の音楽（三味線音楽やお座敷歌等）の影響についても検討する必要がある。

## 文献

- 植木行宣 (2001)『山・鉦・屋台の祭り』白水社
- 植木行宣・田井竜一編 (2010)『祇園囃子の源流—風流拍子物・羯鼓稚児舞・シャギリ』岩田書院
- 上勝町誌編纂委員会編 (1975)『上勝町誌』上勝町誌編纂委員会
- 木沢村誌編纂委員会編 (1976)『木沢村誌』木沢村
- 田井竜一・増田雄 (2005)『「祇園囃子」の系譜序論』植木行宣・田井竜一編『都市の祭礼—山・鉦・屋台と囃子』岩田書院, 79-103頁
- 高橋晋一編 (1997)『徳島の祭りと民俗芸能—宅宮神社神踊り・立江八幡神社祭礼・阿波踊り』徳島大学総合科学部文化人類学研究室
- 高橋晋一 (2003)「穴喰町八幡神社の祇園祭」『徳島地域文化研究』1号, 140-156頁
- 高橋晋一 (2005)「木沢村の祭礼」『阿波学会紀要』51号, 149-154頁
- 高橋晋一 (2008)「徳島県における祭礼山車—文化交流史の視点から」『歴史に見る四国—その内と外と』雄山閣出版, 217-238頁
- 高橋晋一 (2012)「那賀町木頭地区 (旧那賀郡木頭村) の祭りと民俗芸能 (2)」『徳島地域文化研究』10号, 81-115頁
- 高橋晋一 (2015)「阿南市の祭礼山車と囃子」『阿波学会紀要』60号, 157-162頁
- 徳島県教育委員会編 (1972)『徳島県の民俗芸能』徳島県教育委員会
- 那賀川町編さん委員会編 (2002)『那賀川町史 下巻』那賀郡那賀川町
- 羽ノ浦町史編さん委員会編 (1996)『羽ノ浦町史 地域編』那賀郡羽ノ浦町

Gion Bayashi (Gion Festival Music) in Komatsushima City, Tokushima

TAKAHASHI Shin-ichi\* and KAWAUCHI Yuko

\* 1-1 Minamijosanjima-cho, Tokushima 770-8502, JAPAN

Proceedings of Awagakkai, No.64 (2023), pp.85-90.